

は疥癩を生ず。三四週間後には全く治癒脱落す。種痘の場所は可成之を保護し搔き傷つゝ等なさいる様注意すべし。袖は可成廣さを可とす。

▲徒食者と労働

佛蘭西の或統計家は面白い事實を示して居る、其處で先づ四百八十六人の無食の乞食に向つて、日に四法になる仕事を授けるとの事を紹介したので、處が其内で指定された所に出頭したものが百七十四人、其他は劈頭から就職を望まない。それから愈仕事に取懸ると百七十四人の内早くも三十七人は半日働いて二法を貰つて晝食をしに出て行つた。きり鐵砲弾になつて仕舞つたので、無事終日働き終せたのが百三十七人、しかも其内又一日分の賃錢にありついで翌日からは顔を出さなかつたものが六十八人、それから又其翌日には五十一人が十八人になり、而して此の十八のみが百七十四人の多き内で兎に角汗を食に代へる立派な労働者になつたと云ふことそれから夏或冬、某慈善家が無職者と自稱する先生達七百人を寄食させて居つた、で一日労働者救済授職所に行くことを勧めた處が、其勤めに應じて求職に出懸けた者が百人あるにはあつたが、結局二日の後には後にも先にも只の二人しか授職所に居残らなかつたそうである。

貞一の日記 (承前) (明治卅六年) (五月生男兒)

そのの母

五月廿四日 昨日よし(女中の名)と見て來りし、

御嶽神社の御神樂の話をなす、『フタリガツナゲ

シテ オドツテ トンボガヘリヲシタ 『メンヲ

カツイデオドツタ(假面を被りて)』とよしの地

方訛を真似していふ。

五月廿五日 此頃は自分が父さん、母さんになり

母さんを貞一にして遊ぶ、母さんの聲色中々上手

なり、『ナクトステテシマウヨ、』『サアダツコ

シテアゲヨウ』ホントウニカミカミシテオアガ

リヨ』などまじめな顔していふ。

五月廿九日 父の不在中、西村伊作さん來訪せられしに、

早速電車の書を書いてもらふ、寫真帖を見て居られる西村さんの傍に居りしが、父母

と三人にて寫したる寫真を見るや直に、父の顔のあたりへ、今書いて頂いた電車の繪をさしつけて、『トウサンゴラン』と見せる。

五月卅日 小原先生の許にて體量を見て頂く

一、二七七〇〇瓦あり、丹誠の甲斐ありて、成績宜しき方なり、滿三年の小兒のあるべき體量より、三〇〇瓦ばかり多しと仰せらる。

五月卅一日 今日滿三年の誕生日なり、親類の子供を招く、静子さんより、御祝として頂いた水鐵砲が氣に入つて、水遊びしてはキャツ〜と騒ぐ、今迄赤飯を喰へさしても、小豆はより出して、喰へざりしも、今日からはじめて、小豆も喰へさす。

附記。これにて貞一の滿三年までの日記は終はりぬれば、一先こゝにて擱筆す。いと長々と

書き續けて讀者の倦厭の程も左こそと推し量られて。(その母記す)

三十二

この日記にても知らるゝ如く、貞一は滿一年の頃より腸胃の病氣にかゝり夫より大方一年半の間は寧ろ病氣の日の方が多かりし位、一時は殆んど頼み少く思はれたる事もありたり従つて育て方の上にも出来るだけの注意をなしたるに。

『夫にては餘り規則的にて、貞チャンが可愛相ではありませんか』とて、屢、同情深き友より忠告せられし事もありき。『そんなに規則的にするから、子供が弱いのですなわに放抛つて置く方が反つて丈夫なものです』とは、子供がまた持てる友達の忠告なりき。然も之等同情深き數多の忠言ありしに係はらず、貞一の營養法は何處までも規則的なりき。いな〜今も尙菓子

種類も一定して、餡物は一切與へず、菓物も、覆盆子の汁位が精々なり。食事の時間も厳に一定し居るなり。かくて、其後の發育は極めて良好にして、三島氏の健體小兒發育表の相當年齢の小兒の體量に比べても、又は外國人の發育表の夫に比べても、量目多きを見るに至りたり。皮肉な口癖の馬上おぢさんも、此頃の眞一を見てはさすがに「こらどうだ、この肥り方は」!! と歎賞し呉れるなり。されば眞一の健康の回復は全く、信じて行へる規則的の育養法にゐることとを、こゝに表述し、併せてこの結果を得たるは、全く吾が信頼せる小原國手の賜物なることを、茲に同國手に向つて深く感謝す。

(父記す)

實驗上の育兒

醫學博士 瀨川昌著

恐るべき哺乳兒脚氣

▲脚氣の毒 母親が脚氣に懸つたとき又は脚氣の徴候あるときは斷然廢乳しなければならぬ、是迄廢乳すべき病氣に就きお咄し致した中で何の病氣よりも一番哺乳兒に危険を迫ほし、生命に關係するのは此の脚氣で御座います、哺乳兒時代でも分けて幼稚な時代ほど脚氣の毒に胃され易いので、随分是が爲め斃れる哺乳兒は澤山あるが、就中今年は哺乳兒脚氣が多いのです、デ母親は極く輕症な脚氣で、足が少し倦とか、少し麻痺とか位で、果して脚氣になつて居るのか何うか自分にも左程心付かんで立働いて居るが、斯ういふ場合に其の兒には早くも母親の脚氣の毒が感染して恐ろしき